

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

チョコレート

2002 (平成14) 年9月23日鑑賞

Data

監督: マーク・フォスター

出演: ハル・ベリー / ビリー・ボブ・

ソートン / ヒース・レジャ

ー / ショーン・コムズ

👁️👁️ みどころ

02年の第74回アカデミー賞において、ハル・ベリーが黒人初の最優秀主演女優賞を受賞した作品。受賞式での彼女の「やっとチャンスの扉が開かれた」という涙のスピーチは感動的だった。『チョコレート』というタイトルは邦題で、彼女の肌の色などを暗示する。悲しみのどん底にあった男と女が偶然めぐり合い、そして結びついていく……。地味な作品だが、しんみりと心を打たれ、考えさせられる作品。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<黒人初のアカデミー最優秀主演女優賞の受賞>

02年の第74回アカデミー最優秀主演女優賞には『ムーラン・ルージュ』のニコール・キッドマンや『ブリジット・ジョーンズの日記』のレニー・ゼルウィガーらがノミネートされていた。また最優秀主演男優賞には『アイ・アム・サム』のショーン・ベン、『トレーニング デイ』のデンゼル・ワシントン、『アリ』のウィル・スミスらが、さらに昨年『グラディエーター』で最優秀主演男優賞を獲得したラッセル・クロウは、今年も『ビューティフル・マインド』で連覇を狙ったが、栄光はデンゼル・ワシントンに輝いた。

そして最優秀主演女優賞には、大方の予想に反して、黒人女優ハル・ベリーが選出された。男女共に黒人俳優が選ばれたのだ。

これは人種差別の根強いアメリカ、そしてハリウッドの映画界において、アカデミー賞の歴史を塗りかえた出来事だった。

そして受賞式。

ハルは、「この瞬間は、私一人だけのためのものじゃありません。全ての、有色人種で無名の女性のためにあるのです。なぜなら今日、やっとチャンスの扉が開かれたのですから。」

ありがとう。私はとても光栄に思います。」とスピーチした。

<『チョコレート』は邦題。>

『チョコレート』というタイトルは日本でつけたもの。人種問題をベースにしたストーリーにおいて、『チョコレート』というタイトルは女性の肌の色を連想させるもので、すごくピッタリくる。

また『チョコレート』は、肌の色だけではなく、映画の中で登場するチョコレート・アイスクリームやチョコレート・バーにも通じている。

しかしこの映画の原題は『チョコレート』ではなく、『Monster's Ball』というものだ。これが何を意味するのかサッパリわからないが、映画の中のせりふで、その意味が語られる。その意味は、「死刑執行の前夜に刑務所に勤務する死刑執行人たちが開くパーティー」、ということだそう。もっともパンフレットの解説によると、その語源は明らかでないらしいが、まあそんなことはどうでもいい・・・。

<主人公(男) ハンクはこんな人物>

本来の『Monster's Ball』というタイトルからわかるとおり、この映画の主人公(男)は、アメリカ南部のジョージア州の州立刑務所に勤める看守ハンク・グロトウスキ(ビリー・ボブ・ソーントン)。

ハンクの父親もここの看守だったし、息子のソニーもハンクと共にここに勤めている。

引退して自宅療養中の父親は保守的で黒人嫌い。自分の敷地を黒人の子供が通るだけで拒絶反応をおこし、銃で追っ払うようハンクに命ずるほど。ハンクも当然その血をひいている。しかし息子のソニーは黒人にもやさしい。よく言えば柔軟だし、悪く言えば軟弱。ハンクの母親もハンクの妻も既に死亡しているので男ばかり3人の生活だ。そしてハンクは父親も嫌い、息子も嫌い。人間関係は良くない。しかしそんな中でもハンクは、自分の役割だけは守りながら、看守としての勤めを果たしていた。

ところが、死刑執行のための予行演習でソニーは失敗。「本番では絶対に失敗は許されないぞ」とハンクは説教する。そして死刑囚ローレンス(ジョン・コムズ)の死刑執行。

アメリカでの死刑囚の取り扱いや死刑執行の実態は、トム・ハンクス主演の『グリーンマイル』(2000年)で突如有名になったが、普通は世間の人たちは知らないもの。その死刑執行に至る過程が、実に丁寧にかつ淡々と描かれており心を打たれる。

ところがソニーは、その「本番」において大失態を演じてしまった。

死刑執行の終了後、ハンクはソニーを殴りつけた。ところがその数日後、ソニーを責めるハンクに対し、ソニーが突然反抗。何とピストルを抜いて父親を殴り、蹴りつけた。まさに「家庭崩壊」だ。そして「あんたは俺をずっと憎んでいたんだろう？」と質問。

ハンクが「そうだ」と答えると、ソニーは突然ピストルを自分の胸にあてて引き金をひいてしまった。

ハンクは、母親、妻に続いて一人息子のソニーも失ってしまったのだ。

<主人公（女）レティシアはこんな人物>

他方、レティシア（ハル・ベリー）は、死刑囚の夫ローレンスをもつ身。10年以上刑務所に面会を続けながら一人息子のタイレルを育てているが、タイレルはそんな境遇で育ったためか、過食症で肥満児。陰にかくれてチョコレート・バーを食べる始末。

しかし彼には一つだけ才能があった。それはローレンスのもつ絵の才能だ。死刑囚のローレンスがスケッチで描く看守の似顔絵は、この映画では、見ず知らずの主人公二人を結びつける上で重要な小道具の役割を果たしている。

いよいよ死刑執行のその日が近づく中、最後の面会に母子がおとずれた。最後のお別れだが、レティシアはもはや疲れ切っているためか、どこか冷めたところがある。「車の調子は？」と聞くローレンス。しかし車は冷却水の調子が悪い。その上「家賃も払えないため、家も立退きになりそう。もうどうしようもない。」とレティシアは訴える。死刑執行を間近にひかえたローレンスは、これに対して「申し訳ない」と妻に謝る。

貧困という現実はいまだに人間の気持ちのつながりに影響を与えるものかと悲しくなってしまう。そして父親と息子は最後の抱擁をかわし、死刑執行の直前での電話連絡を約束して別れた。

死刑執行の日。母子は電話を待つが、結局許可を得られなかったため、電話はなかった。

そしてその日も息子はいかされてチョコレート・バーを……。レティシアは怒りを爆発させ、愛する息子にハツ当たりだ。

<二人の偶然の出会い>

車の調子が悪い。アメリカでは車は生活のための必需品。そのためレティシアは勤め先に遅刻し、クビになる羽目に。家賃滞納により、30日以内に家も退去しなければならぬ。

そんな中、やっと、レストランのウェイトレスという次の働き口が見つかった。

そして、このレストランの常連客がハンクだ。ハンクはいつもここでチョコレート・アイスクリームを食べていた。そのハンクにはじめてチョコレート・アイスクリームを出すレティシア……。これが二人のはじめての出会いだ。

しかし不幸な人間に不幸は続くもの。

雨降りの中、勤めが終わって息子と一緒に自宅に向かっていたレティシアは、息子を車

にはねられてしまったのだ。雨の中、息子が車にひかれ助けを呼ぶレティシア。そこに偶然ハンクが車で通りかかった。もちろんハンクはその被害者が誰かわからない。しかし、「戻ってきて！」と泣きさけぶ姿をバックミラーで見て、息子ソニーを失ったばかりのハンクは車をバックさせた。そして母子を車に乗せ、病院へ運んだ。しかし、レティシアの肥満症の息子タイレルはあっけなく死亡。

ハンクはレティシアを自宅まで送りとどけることになった。

その後、チョコレート・アイスクリームを食べにいくレストランで、ハンクはレティシアをなぐさめる立場になっていた。

車の中でレティシアは、「あの時なぜ私達を助けてくれたの？」と聞いた。ハンクの答えは、「自分が息子を失った悲しみの中で、助けなければならなかったからだ」というもの。つまりハンクは、自分の正直な気持ちを率直にレティシアに打ち明けることができたのだ。

ハンクには今まで誰も、心の中を打ち明ける話し相手などいなかった。しかし今やハンクにも、悲しみを共有し、理解し合えそうな、黒人女性ながらもなかなか美人の女性が目の前にあらわれたのだった。

他方レティシアは・・・。

ハンクの話聞いたレティシアは、「私の家にこない？」と誘う。そしてジャック・ダニエルをガブ飲みし、酔っぱらいながら（酔っぱらったフリをしながら）、自分の悲しみの丈をハンクにぶちまけた。

<映画史上に残るラブシーン>

ここでラブシーンが始まる。ソファの上に座っての話し合いからのいきなりの展開だから、ベッドまで行く余裕などない。当然ソファ上での絡みだ。

実は、この『チョコレート』という映画は成人映画に指定され、18歳未満は入れないことになっていた。

アカデミー賞の最優秀主演女優賞の作品がなぜ・・・？とっていたら、その理由はこのラブシーンにあった。なるほど、このラブシーンの場面はかなり濃密だ。18歳未満には刺激が強すぎる・・・？（今時そんなことは絶対ないと思うが・・・）。そのうえレティシアのせりふはすごい。レティシアは「私を抱いて！気持ちよくして！私を女にして！」と叫ぶのだ。

ソファの上で、そしてまた、ころがり落ちた床の上で激しく二人は絡み合う。レティシアのあえぎ声もすごいし、最後はレティシアが上になっている。

コトが終わった後のハンクの、「こんなに良かったのははじめてだ。」というせりふも、通りいっぺんの言葉とは思えず、真実味がある。

男と女の間にはいろいろあるだろうが、こんな不幸な境遇におかれた男と女を結びつけるには、激しいセックスが大切なことがよくわかる。歯の浮くような口説き言葉はお互いの気持ちを白けさせるだけで、それぞれの心の奥に持つ悲しみを忘れさせることはできないだろう。

動物的な激しいセックスのみが、悲しみを忘れさせ、2人の結びつきを確認させてくれる唯一の手段であることがよくわかる。悲しくて、激しくて、そして美しいラブシーンだ。

<2人の仲は・・・、その後の展開は・・・>

ハンクは、レティシアが死刑囚ローレンスの妻だったことを知っているが、レティシアは、ハンクがローレンスの死刑執行をした刑務所の看守だったことを知らない。

しかし物語の展開とともにそれがレティシアに知れることに・・・。

さてレティシアの気持ちは・・・？そして2人の結びつきは・・・？

この映画ではラストシーンの、二人が玄関の階段に並んで座る場面の中で、それについて一定の方向を示している。すなわち、「僕達はきっとうまくいくよ」というハンクのせりふだ。

だが、このせりふは、レティシアが秘密を知ったことに気づいていないハンクが語るものだ。従って、それに気づいた後の二人の結びつきはどうなるのか・・・？当然「流動的」なものになるはずだ。

しかし、それはレティシアとハンクがそれぞれよく考えて決めるべきことだ。映画の中で結論を出してしまう必要はないだろう。

映画の観客の1人1人が、自分と自分にとって一番大切な人との結びつきについて、自分でよく考えて決めているように・・・。

<観客の少なさにビックリ・・・>

私は、「このチョコレートという作品は絶対に観なければ・・・」と思っていたが、なかなかチャンスがなく打ち切り直前になって観に行ったら。

しかしその日の観客は約20名。その少なさにビックリしてしまった。こんないい映画、こんな話題作なのに・・・。

繰り返し商業的に楽される娯楽大作ばかり観に行かないで、こういう心にしみる名作を是非観てもらいたいと思う。

2002（平成14）年9月24日記